私の履歴書 ⑦

釜本邦茂

代表選手に

1964年1月28日の新聞紙上で日本代表メンバーが発表された。そこに大学生では自分と杉山隆一さんの名前だけがあった。自分にとっては、10月に開催される東京五輪の選考レースの幕開けだった。

前年夏、日本代表Bに選ばれ、船とシベリア鉄道に揺られてソ連国内を転戦した。復路、ナホトカ港を出た船が津軽海峡を通る時、青森で下ろしてくれないかと思うほどの過酷な旅だった。帰国後、関東大学リーグに続いて天皇杯も制し、ついにA代表入り。また一歩、東京五輪に近づいたと気持ちを新たにした。

2月の東南アジア遠征に向けた合宿で千葉県検見川の東大グラウンドに集まった時、八重樫茂生さん、川淵三郎さん、小沢通宏さんら諸先輩を間近にして「かっこええな」とファン目線で見ていた。

東南アジア勢に連敗

日本の現実を知りショック

日本代表の長沼健監督、岡野俊一郎コーチの指導もここから本格的に受けるようになった。健さんは「ごまかしの通用しない人」という厳しさを感じさせる一方、選手思いの人情家という感じ。岡野さんの第一印象は「よう怒る人や」。私の欠点を熟知し注文がめちゃくちゃ多かった。ミーティングで戦術的な細かいことを話すのも岡野さんの役目。東大出だけに頭は良くてサッカーに精通していた。

代表チームで一番世話になった人といえば、早大の先輩でもある八重樫さんになる。練習中にずれたパスを出すと触りもせず「取ってこい」という厳しい人だった。サッカー観、代表選手の心構え、何から何まで影響を受けた。

東南アジア遠征初戦はタイ銀行に0―0で引き分け、第2戦のタイ空軍には1―3で敗れた。先発で第2戦で初めて使われた私は八重樫さんがくれたパスをヒールを使って戻そうとして、八重樫さんが進む方向とは逆にパスを出してしまう。雷が落ちた。

「おまえ、この暑い中で味方がどんなに苦労してボールを奪ったか分かってんのか。すぐに一人で取り返してこい」。試合の最中に立ち止まって説教されたのはそれが初めてだった。私は19歳、八重樫さんは30歳。試合が終わった後も説教は続いた。

「ええカッコしてもボールを相手に取られちゃなんにもならん。日本でやってるならかしかった。

代表戦での八重樫さん㊥と筆者㊨＝フォート・キシモト提供

代表はいろんな意味で厳しい場所だった。DFの宮本征勝さんや片山洋さんは、やられた相手に同情したくなるほどのタックルを見舞う人だった。練習中は敵味方の区別さえなく、足を蹴られて「痛いやないですか」と苦情をいうと「痛かったら家に帰れ」と言い返されたりした。まあ今の基準なら一発退場というような荒技がピッチで平気で飛び交う時代ではあったが。

こちらは日本代表なのに相手はタイの銀行だの空軍だのが出てきて、それでも日本は勝てないという現実もショックだった。続くマレーシア、シンガポールでの4試合で3得点を挙げたものの日本の立ち位置をまざまざと思い知らされた。

（日本サッカー協会顧問）

掲載日　2016年2月7日　日本経済新聞 朝刊　32ページ
©日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。